

アチック・ミュージアムと大日本聯合青年団の関連性

——アチック同人大西伍一を事例に——

The Relationship between Attic Museum and the Dainippon Youth Group:
A Case Study of Attic Coterie ONISHI Goichi

小林 光一郎

KOBAYASHI Koichiro

要 旨

本論では、1920～30年代において、当時形成されつつあった民俗学と1925年に創立した大日本聯合青年団との関連性について、柳田國男らの民俗学と並行して物質文化や水産史などの研究を行っていたアチック・ミュージアム（以下、アチック）と大日本聯合青年団の関連性、なかでも大日本聯合青年団郷土資料陳列所（以下、陳列所）に勤めると同時に、アチックにおいて「漁民傳」の編纂作業を行った大西伍一（以下、大西）を通してそれらの関連性を見ていくことを主旨とした。

大西の青年一人一人に合わせた教育という大志は、大日本聯合青年団における「一人一研究」奨励や陳列所における活動を通して当時の民俗学へと影響してゆき、柳田やアチックへと広がりを見せながら更なる発展・昇華してゆく可能性を秘めていた。また、そのような活動に連動した大西の成果では、大西作成の『郷土研究家名簿』（以下、名簿）が連絡手段としての有用性や人的ネットワーク作成という草創期である当時の民俗学界に大きな貢献をしており、アチックでもこの名簿作成がなければアチックの通信調査の元となる名簿作成が困難であったと推測され、調査における郷土の人脈網が変わっていたと考えられる。他にもこれら大日本聯合青年団における大西自身の人脈は、名簿に代表される郷土史家だけでなく、直接アチックに関わるような地方の人材（吉田三郎）、陳列所関係で知り得た人物（進藤松司）といった人脈（≡青年）をアチックに紹介することにもなった。特に郷土研究のモデルともいえる吉田とアチックとの出会いは、その後のアチックの研究に対する思考・姿勢やそれに伴う地方研究者への研究奨励といったアチックの方針を一定の方向へと決定づける機縁となったともいえるものであった。

このような大西の大志はこのまま実を結ぶかに思えた。しかし、当時の時代性を受けた陳列所の閉鎖という物理的な影響、またその時代性とともにな変わっていく大日本聯合青年団の変化（後ろ盾でもあった田沢の理事長辞職に伴う影響）によってその大志が実を結ぶことなく終息してしまったのである。

【キーワード】 アチック・ミュージアム、大日本聯合青年団郷土資料陳列所、民具、渋沢敬三、吉田三郎

1. はじめに

1920～30年代において、当時形成されつつあった民俗学と1925（大正14）年4月15日に創立した青年団の中央組織である日本青年館および大日本聯合青年団との関連性について、柳田國男らの民俗学と並行して物質文化や水産史などを中心に研究を行っていたアチック・ミュージアム（以下、アチック）と大日本聯合青年団の関連性、なかでも大日本聯合青年団郷土資料陳列所に勤めると同時に、アチックにおいて「漁民傳」の編纂作業を行った大西伍一（以下、大西）を事例に、大西個人の動きをトレースすることで、民俗学という一学問の歴史を問い直すにとどまらず、「青年の学問」として民俗学が期待され立ち上がっていった同時代の社会や政治・文化をめぐる状況を掘り下げるとともに、大日本聯合青年団と青年を取り巻く社会状況が変化していく中で、大日本聯合青年団において行われた民俗学に関する事業の内実についても論証していく。

2. 大西伍一の略年譜

本論の中心となる大西伍一の略年譜を見て行こう。本章では大西の人生を「幼少期から教員時代」「農民自治会活動時代」「大日本聯合青年団郷土資料陳列所主任時代」と大きく三つの時代に区分し、それぞれの時代において大日本聯合青年団や民俗学に関連する事柄を中心にまとめていくことにする。

1) 幼少期から教員時代

大西は1898（明治31）年兵庫県揖保郡布施村南山（現たつの市）の農家に生まれる。姫路師範学校卒業後、複数の小学校において小学校教員（姫路師範学校附属城北小学校に6年、1924（大正13）年上京後、東京府女子師範学校附属竹早小学校（現東京学芸大学附属竹早小学校）に1年、東京市立関口台町小学校（文京区立関口台町小学校）に1年の、在職8年間）の間に、下中弥三郎が中心となって結成した日本教員組合啓明会（以下、啓明会）に参加している。この啓明会は校長公選論といった急進的な教育改革を唱えた教職員労働組合であった。

啓明会に参会していた時期、大西はのちにアチックに関係する吉田三郎⁽¹⁾と知り合う機会を持っている。郷土である兵庫県の仲間数人で出版した「あおぞら」という同人雑誌がその機縁で、大西は次のように述懐する。

大正の末ころ、私は郷里兵庫県の仲間数人で、小さな「あおぞら」誌を出したことがある。それを秋田市外で兄弟愛道場を営んでいた鈴木真州雄氏に送った。鈴木氏は私と共に啓明会（下中弥三郎氏主宰）の会員としての間柄であった。鈴木氏は私からの一冊を、見所のある青年吉田君に渡したらしい。吉田君は鈴木氏に傾倒していた求道者の一人であったが、早速「あおぞら」の会員申込書を私の家へよこした。[大西 1972：1]

2) 農民自治会活動時代

1926（大正15）年、『土の教育』出版、教員生活に終止符を打つ。この教員を辞めることは大西にとって相当の覚悟をもって今後に当たろうという決意の表れであり、その思いについて大西は

『土の教育』で次のように述べている⁽²⁾。

熟々現代の教育界を見渡すに、制度の劃一と教権の強大、及び教員の無節操とは、教育をしてたゞ現状擁護の機関たらしめる以上に何の能もない観がある。かゝる雰囲気の中に私は獨善主義者にも冷笑主義者にもなりえず、苦悶の中に八年間の教員生活を續けて来た始終異端者呼ばはりされながらも、無理解な厭迫や敬遠と闘つて来た。然し現状のまゝでは青少年の若い魂に「世界の希望」を認めることも出来ない。今はもはや安閑として此所に留つてゐるに忍びない。眞実の教育を地上に出さなければならん。[大西 1926：2]

また、同書「學習に就いて（三）青年部の教育」において「（前略）實施に際して留意すべきは、年令の増加に伴ひ實生活上の要求が益々増大するといふことである。即ち各個性の要求といふことを最も重視しなければならん。」[大西 1926：354]ともしている。

このようにこれまでの学校教育において当たり前であった画一的な教科の教育を否定し、「『何でもよい、君の欲するものを研究したまへ。我々はそれに出来るだけの便宜を與へるから』これが此の學校へ入學して来た者に第一に聞かせるべき言葉でありたい。」[大西 1926：356]として青年一人一人に合わせた教育をすべきだとの理想の元、教員を辞している。これはそれまでの教員としての教育の限界を感じ、あらたな教育の方法やそのあり方を模索した決断であった。大西の教育者としての動向を調べた教育学者の小林も「大西にとって教員をやめることは、国家目標の伝達機関としての公教育の制度を身をもって否定することであり、そうではない教育の構想を打ち立てようとするところでもあった。すなわち、教職を捨てることが、実は教師として自立することだったのである。」[小林 1983：35]としてこの大西の一連の動きを考察している。

この青年一人一人に合わせた教育は大日本聯合青年団における「一人一研究」奨励の考えと一致する考えであり、このような新たな教育の姿は実践としてその後の大日本聯合青年団における活動に繋がっていくことになる。

教員辞職後、農村文化運動である農民自治会活動に参加、大西自身も農村教育研究会を主宰する(1928(昭和3)年。雑誌『農村教育研究』発行)。この頃の大西の活動を前述の小林は次のように評している。

28年(注：1928年)6月に『農村教育研究』を創刊して始まった農村教育研究会は、大西のこの構想を實踐に移したものである。下中弥三郎の他に小田内通敏や小野武夫、小出満二ら同時代の地理学者や農学者たちを顧問とし、志垣寛や峯地光重ら児童の村小学校関係者、および鏈田研一や小出啓吾ら農民自治会関係者を同人とするこの会は、30年(注：1930年)8月に事実上解散するまで25号の機関誌を発行し、全3回の地方講習会を開催全している。尾高豊作と小田内通敏によって郷土教育連盟が創立される前段階として、いわゆるアナ系の新教育関係者と農学者や地理学者との交流を図り、かつ全国の農村教育関係者の論稿を発表したという点でこの会は一定の役割を果たしたと考えられる。そしてこの会が2年余りの間持続するのには、大西の個人的な努力によるところが大きかった。[小林 1983：37]

峯地光重との共著『新郷土教育の原理と實際』は彼のこのような郷土研究および郷土教育観を具体化したものである。すなわち、同書は、「所謂郷土愛教育の範囲を出ない」「旧郷土教育」に対して、「農村社会の實體を科学的立場から究めて、概念なき認識を確立し、こゝに一切の指導原理を見出す」

べく「新郷土教育」を提唱したのであった。その第三章「我国に於ける郷土研究の発展」は、同時代の郷土研究の趨勢を大西がどう理解していたかを教えてくれる。彼は1910年の「郷土会」創立に一つの起点をおき、そこから柳田国男らの「土俗民俗学的方面」、小田内通敏らの「地理学的方面」、小出満二らの「社会経済学的方面」が派生したと捉え、それらをさして「科学的立場」と考える。[小林 1983 : 37]

この農民自治会活動の間に、郷土調査にも従事（小野武夫らと交流。昭和2年3月小野武夫助手）し、1930（昭和5）年1月『郷土研究家名簿』（農村教育研究会）を編さん、1931（昭和6）年大蔵永常農学全集刊行会を手伝い（「大蔵永常農学全集刊行会が組織せられ、小野武夫博士がその実行委員であった頃、私もその御指図を仰いで、同会の雑用を手伝ったことがある。」[大西 1943 : 920]）、その後、1933（昭和8）年『日本老農伝』を著すことになる。この時代に、小野、小出、柳田といった郷土会のメンバーと出会ったことが後に大西が大日本聯合青年団へ勤務することへとつながっていく契機となっている。

また、後のアチックの研究方法にも影響を与える『郷土研究家名簿』の作成をこの時代に行っている。大西はその経緯を次のように述べている。

柳田先生にお近づき願ってから二、三年であったように思う。先生のお勧めで『郷土研究家名簿』を、私が主催していた農村教育研究会から発行（昭和五年一月）したことがある。全国各地に散在する多数の研究家が、おたがいにその氏名・住所・職業・研究テーマ・著書並びに所属学会を知り、その後の連絡協調の便に資するためのもの。最初に先生関係の名簿をいただき、往復はがきで照会したもので、全国の郷土研究家約五五〇人を登載した。この費用約五〇円は、全部先生から頂戴した。⁽³⁾
[大西 1968 : 13]

このときの名簿が後にアチックにおいても加筆修正されながら使われ、調査当地の郷土史家連絡やアチックとの相互連絡網、研究の一環としての『民具問答集』などのデータベースとして使われたのである。

3) 大日本聯合青年団郷土資料陳列所主任時代

農村自治会活動や郷土会メンバーとの親交を深めたことなどに関連したのであろう、大西は大日本聯合青年団に勤めるようになる。1933（昭和8）年、大日本聯合青年団郷土資料陳列所臨時事務職員（嘱託）に就任（「昭和八年、私は大日本聯合青年団に勤めることになった。創立十周年記念に郷土資料陳列所を創立するためである。」[大西 1972 : 1]）、1934（昭和9）年11月2日大日本聯合青年団郷土資料陳列所主任（嘱託）に就任。郷土資料陳列所（以下、陳列所。図1、図2）は大日本聯合青年団理事長田沢義鋪の肝いりの事業であったが、同年中に田沢は理事長を辞す。1937（昭和12）年、陳列所も縮小（事実上の閉鎖）、大西も大日本聯合青年団を離職する（1937（昭和12）年11月1日付）。この一連の動きは、大日本聯合青年団における田沢の動きと連動しており、田沢の影響力の低下に伴い、陳列所も縮小し、その後、田沢の理事長辞職と共に陳列所閉鎖へと向かっていったと考えられる（後述）⁽⁴⁾。

さて、郷土資料陳列所に関わる大西について、大日本聯合青年団ではどのような人物として捉えていたのだろうか。『日本青年新聞』では開設前の報告として大西と陳列所について次のように説

明している。

さきに報告した本團創立十周年記念事業である青年團郷土博物館建設計画に就ては、今回大西伍一氏囑託して専心計画を進めてゐる。大西氏は「現實農村調査と青年指導」及「日本老農傳」の著者にして、この方面に特に造詣深い篤學者である。建設の根本方針としては、我國古來からの青年生活の経過並に現在青年團の活動状況に関する各種の資料を陳列展示すると共に各種研究資料を備へて研究者の便に供するを以て第一目的とするのである。[「調査部ニース」『日本青年新聞 第六十八號』昭和八年七月十五日付、四面]

このように、「現實農村調査と青年指導」「日本老農傳」の著者にして、この方面に特に造詣深い篤學者」として大西を捉えており、この大西を中心として「我國古來からの青年生活の経過並に現在青年團の活動状況に関する各種の資料を陳列展示すると共に各種研究資料を備へて研究者の便に供するを以て第一目的とする」方針の元に郷土資料陳列所を運営していくというのが大日本聯合青年団の姿勢であった。

また、『日本青年新聞』では「郷土資料陳列所設立の趣意」も掲載している。

わが大日本聯合青年團の成立したのは去る大正十三年の十月、日本青年館の開館されたのは同十四年の十月でありました。來る昭和九年十月は恰も團成立の満十周年に相當すると共に、わが日本青年館が、力強き十年への歩みを首途する意義深き月に相當致します。本團はこの歴史的十月を期して、両者の十周年記念事業として、多年懸案の郷土資料陳列所を日本青年館内に開設し、廣く青年諸君、青年館宿泊者並に一般參觀者の觀覽利用に供することになりました。

申すまでもなく、郷土は人類活動の根源であり、民族生活の母胎であります。わが國の青年團はこの郷土生活の中に深く根ざした若衆組、若連中等の自然に發達したもので、外國の青年運動とは自からその軌を異にしてゐます。故に一國隆替の原動力を以て任ずる我國の青年團教育としては是非とも郷土研究を行ひ、わが民族文化がわが國土に即して如何に發展して來たかを究めねばならぬと思ひます。近時郷土研究或は郷土教育に関する輿論の勃興は歎ばしい現象であります、この興味と知識を青年の間に普及することは現下の國情より考へて極めて切要であるのみならず郷土研究も郷土教育も青年の手によつてのみ始めて實を結ぶものと信ずるものであります。



図1 陳列所の一部をかざる各種の生活用具と農具 [「第二回全國商工精勵青年大會グラフ」]

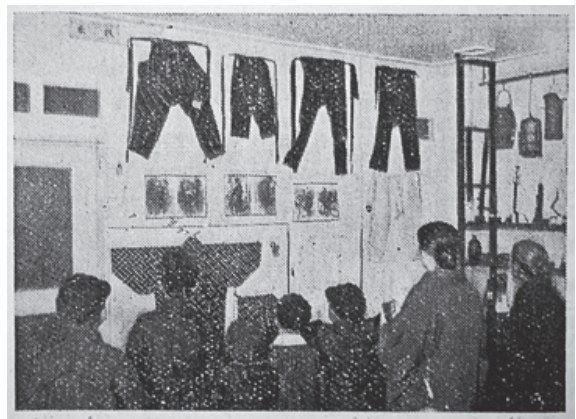


図2 第二室山袴類（もんぺ・かるさん・たつつけ）に見入る人々 [「力強く郷土美を誇る 郷土資料陳列所開所」『日本青年新聞 第百號』昭和九年十一月十五日付、四面]

本團は従来も各種講習會、郷土舞踊と民謡の會、全國青年創作副業品展覽會、郷土調査項目の募集其他種々の方法を講じて青年の郷土に對する認識を深め、これが愛護と開発の為に努力せしむべく微力を捧げて來ました。

今回の計畫はこれに一步を進めたもので、その趣意とするところは、青年をして（一）郷土研究の目的を明確に把握せしめ（二）郷土研究の興味を喚起し（三）郷土研究の方法を知らしめるにあります。

幸に全國の青年團員諸君並に識者諸賢が舉つてこの舉に賛同せられたとひ一點づゝの微と雖も協力援助下さるならば、その集積は必ずやわが民族生活の上に大いなる意義を齎すことを信じます。

過ぐる十年前、わが日本青年館が全國青年團員の勤勞の醸金と関係者各位の熱烈なる支援とに成つた様に、今や日本民族運動の黎明に際して、この郷土資料陳列所の大成の為に切に各位の御援助を熱望する次第であります。[「郷土資料陳列所設立の趣意」『日本青年新聞 第七十四號』昭和八年十月十五日付、五面]

このように青年をして「（一）郷土研究の目的を明確に把握せしめ」、「（二）郷土研究の興味を喚起し」、「（三）郷土研究の方法を知らしめる」ことを趣意として陳列所を設立したとしている。この陳列所設立の趣意はこれまでの大西の考えや活動と一致しており、この趣意に則りながら大西を中心とした陳列所は、郷土資料の収集・製作やそれら資料の展示、調査活動、講演などを行っていたのである。

その後、郷土資料陳列所は事実上の閉鎖（後述）を迎え、大西も大日本聯合青年団を辞職、以後は、日本生活協會調査部囑託を経て、戦後を挟みつつ 1946（昭和 21）年東京高等農林学校（現東京農工大学）事務兼授業囑託、同図書館事務、府中市立図書館長を勤めた。

3. アチックと大西伍一との関係性前史

前章まで大西の大日本聯合青年団や民俗学に関連する事柄を中心とした略年譜を見てきた訳であるが、大西とアチックとが実際に関係するのは前章の第 2 節「農民自治会活動時代」と第 3 節「大日本聯合青年団郷土資料陳列所主任時代」の時期にあたる。本章ではこの両時期中心に大西がどのようにしてアチックに参加していくのかをアチックの動きと連動させながら、その経緯をまとめていく。

前述したように、大西は 1933（昭和 8）年『日本労農伝』出版後、大日本聯合青年団へ勤めるこ



図 3 「昭和 9 年 11 月 23 日 村上君三面行歓送会」（アチック写真 AL78-15。大西は後列左から二人目）

とになる。大西は「昭和八年、私は大日本聯合青年団に勤めることになった。創立十周年記念に郷土資料陳列所を創立するためである。」[大西 1972：1] と当時を述べ、また「公式には隔日勤務であったが給料に関係なく毎日青年館へ通った」[多仁 1989：4] とも述べている。

その後、農民自治会運動で知り合った吉田三郎を渋谷敬三（以下、敬三）に紹介する（後述）。1934（昭和 9）年アチックの薩南十島調査に参加。この十島調査参加後に大西はアチックに参加し漁民伝編纂を担当（1936（昭和 11）年

2月)する。その頃の様子として神奈川大学日本常民文化研究所所蔵のアチック写真に大西の姿が確認できる(図3)。たとえば十島調査での写真では「245 十島宝島珊瑚礁上にて 昭和9.5.」[『柏葉拾遺』]、他にも1935(昭和10)年来日したシュミットとの記念写真である「255 シュミット博士を囲みて 綱町邸 昭和10.6.19」[『柏葉拾遺』 図4]などに敬三やアチック同人らと共に写る写真がある。



図4 「昭和10年6月19日シュミット教授歓迎会」(アチック写真SR19-2-1。大西は前列左から二人目)

このように大西は、大日本聯合青年団に勤める傍ら、アチックにおいても研究を行うようになったのであるが、大日本聯合青年団とアチック

の二足の草鞋を履く前段階において、アチック(敬三)に前述の農民自治会運動で知り合った吉田三郎を紹介することになる。その経緯について時系列的に見てみよう。

1933(昭和8)年8月、大西は農民自治会運動の講演を下中らと共に秋田で行う。その際、吉田宅に一時泊っている。一方敬三はアチック同人と共に同年十月、「角館・田沢湖・仙岩峠・沢内」調査を行っているがここではまだ吉田の存在を知らず出会ってはいない。その後、大西は同年の晩秋、再度吉田を訪ね男鹿の民俗についての話を聞き、それを何かしら書いて記録するように勤めている[大西 1972:1]。

翌1934(昭和9)年春先、吉田の原稿が大西のもとに送られ、これを柳田に見せると、柳田は「これならどこの本屋でも出してくれるだろう」[大西 1972:2]として吉田の原稿を評価している。大西は柳田にも評価を得たこの吉田の原稿を何とか出版したいと思いアチックに吉田の原稿を持ち込み出版の約束を取り付けた。前述したように敬三としても「角館・田沢湖・仙岩峠・沢内」調査を行い多少なりとも当地近隣の知識を持っていた秋田の一青年の原稿であったということもその評価に影響していたであろう。この当時の様子を大西は次のように述べている。

澁澤先生主宰のアチック・ミュージアムから、地方の無名の著者の書いたものでも、資料的価値のある民俗書の類が出版されていることに思い付き、吉田君の原稿を持ち込んだ。間もなく、澁澤先生から出版の快諾を得たときの嬉しさ。[大西 1972:2]

このように柳田が一定の評価を与え、また敬三からの評価も得た吉田の原稿であったが、「澁澤先生のお話によると、この本には写真や図面を入れたいが、それが一枚もない。また吉田君の生活や村の実態にも触れたいから、二、三の人と訪ねてみたい」[大西 1972:2]として出版に際し敬三から提案を受けることになる。

その後、前述したように1934(昭和9)年5月に「薩南十島調査」が行われそこに大西も参加する。大西がこの十島調査に参加した理由は郷土会関係者であったことと、大日本聯合青年団関係者であったことが理由として考えられ、また吉田の原稿出版に関連した敬三(アチック)との交渉も関係していたと考えられる。ともかくこの十島調査中においても敬三と大西の間で吉田の原稿について話しあわれたであろうと推測される。

十島調査後、敬三は自身の提案した通りに1934(昭和9)年9月「男鹿、石神、八戸」調査を大西らと共にに行った。「この訪問のときに一行のものした写真や図面を加えて編集したものが、翌年

には『男鹿寒風山麓農民手記』と題して、アチック・ミュージアムから出版（昭和十年三月）された次第。書名は澁澤先生の命名である。これに続いて『男鹿寒風山麓農民日録』が出版（昭和十三年五月）されたが、これは澁澤先生と石黒忠篤、土屋喬雄両先生の企画、勧誘によるものであった。」[大西 1972：2]と大西は当時のことを述べている。

このような経緯で大西・吉田・敬三（アチック）という相関関係が出来上がりそれぞれにおいて影響を与え合うような関係へとなっていったのである。特に吉田は大西との出会いを経た後、敬三（アチック）との関係性が生まれ、一地方の青年でしかなかった吉田が出会うはずのない敬三に出会ったことで、秋田を出て東京に出てくることにまでなるのであり⁽⁵⁾、吉田の人生を大きく変えた出会いであったといえるであろう。その後吉田とアチックとの関係は戦後まで続いていくことになる。

この吉田の原稿出版とは、アチックにおける出版活動のうち、学者や地方の研究者ではない人物による出版、つまり、地方在住の住民（生活者）の手による研究報告書出版の第一歩となるものであり、後の進藤松司⁽⁶⁾（『アチックミュージアム彙報第13 安芸三津漁民手記』昭和12年）や佐藤三三郎（『アチックミュージアム彙報第19 北海道幌別漁村生活誌』昭和13年）といった地方在住住民の手による研究報告書出版の嚆矢となるものであった。また、この吉田の原稿自体が大日本聯合青年団や陳列所の掲げる郷土研究の趣意に合致するものであり、言いかえれば、その地域に暮らす人がその地域の研究を行った成果としての事例でもあったのである⁽⁷⁾。

4. アチックにおける大西伍一

この4章では前章に引き続く形でアチックの動きと大西がアチックに関わった事柄を中心に、大西がどのような経緯でアチックを辞め、またそれと前後して大日本聯合青年団を辞めていったのかをまとめていく。

前述したように大西は、1934（昭和9）年11月2日大日本聯合青年団郷土資料陳列所主任（囑託）に就任しているが、この陳列所にアチックから村上清文が1935（昭和10）年9月より日本青年館郷土資料陳列所に勤め始めることになる。村上は1936（昭和6）年5月⁽⁸⁾からアチックに住み込み、民具研究や民具資料整理を行った人物であり[小林 2014a：72]、十島調査にも参加している。村上は陳列所において、資料の整理や展示活動（1935（昭和10）年2月13日「スキーとカンザキ」の展覧会）⁽⁹⁾など、アチックにおける資料整理活動の経験を生かした仕事を行った。

村上が陳列所に勤めたその当時、村上は新潟県三面での長期滞在調査（1934（昭和9）年11月～1935（昭和10）年8月）⁽¹⁰⁾を行っており、それをひとまず切り上げる形で陳列所に勤めることになった。これはおそらく、アチック初の長期参与観察調査であった三面調査を途中で切り上げてまで陳列所に勤めてほしいという敬三の意思がそこにあったのではないだろうかと推測される（後述）。村上の陳列所勤務とは、アチックとして大日本聯合青年団の活動に賛同を示すとともに当時のアチックの資料整理の担当を参加させるという最大限の協力をしたことになるわけであり、そこにアチック（敬三）の意思も影響しているであろう。

一方、大西がアチックに本格的に参加するのは1936（昭和11）年2月からである⁽¹¹⁾。アチックでは漁民伝編纂を担当する。大西の漁民伝編纂作業は以後1年以上続くことになる。この漁民伝であるがその編纂の経緯についてアチックマンスリーから拾ってみると、

漁民傳の編纂は本年二月開始。年内には文庫本全部終了の豫定。この間に約一千人かと思はれる人物

の事蹟を採録することが出来た時代は先づ鎌倉時代以後、但し徳川中期以後が殊に多い。引用文献は文庫所蔵本中漁業関係のもの及び郷土史誌類全部に亘り無慮何冊なるかを知らないが、同一の學問系統に関する資料がこれだけ集大成されつゝあることに感謝せざるを得なかつた。この仕事は要するに人名辭典を編纂する様なものであつた。後に來る人の為に未開地の略地圖を描いてをく様な氣がした。どの道を踏んで、どこへ進まうかといふことは新しい戰士の作戰に委す。ただその場合に多少の道案内となり一人の漁民事蹟が戰士の作戰資料として役立ち得れば幸である。この仕事をしながらお蔭で私は漁業史に関する概念を得ることが出来た。と同時に幾多漁業史上究明さるべき興味ある問題に触れることも出来た。また漁業史が農業史との對稱により、如何なる特異性を有するものであるかを察知することが出来た。これらは私自身の得た副産物として感謝しなければならぬものである。(大西) [「烏兎早早—アチックの一年—」『アチックマンスリー 19号』 1936: 2-3]

とあり、限定的にアチック内にあった「文庫」と呼ばれる水産史研究を集めた施設図書室内の資料について作業が終わったということがわかる。また、翌 1937 (昭和 12) 年 1 月 15 日「新年打合せ會」において敬三は「漁業史の一方面である漁業技術史の方面を見ますと、大西氏の漁民傳も目下進行中でありますし、私自身の魚名集覧の編纂も其の魚名總數七千に達し目下是も整理中であります。尚ほ漁業史には漁具の問題、就中原始漁具 (ウケ等の漁具) の研究と云ふ問題があります。即ち一般漁業史の他に漁民、魚名漁具の三方面からも漁業史を見て行きたいと思つて居ります。」[「新年打合せ會」『アチックマンスリー 20号』 1936: 1] と報告をしている。その後、昭和 12 年 3 月「MEMO」において「漁民傳の資料整理は愈々今月中で終了の豫定。採録人員は索引が出来てみないと正確なことは分らないが、一千二三百位の見込である。(大西)」[「MEMO」『アチックマンスリー 23号』 1937: 1] とあり、別号のその年を回顧する記事 (「一九三七年のアチックの回顧」) では、「大西君は今夏漁人傳を完成された。」[「一九三七年のアチックの回顧」『アチックマンスリー 30号』 1937: 1] とあることから、漁民傳の資料の範囲はアチックの文庫を一区切りとしていたと推測される。しかし、漁民傳完成とするという記載とは裏腹に、漁民傳はその後すぐには刊行されず、漁民傳編纂作業は後任の鈴木行三によって「引續き漁民事蹟の資料蒐集及び蒐集洩れの分再調査中。(鈴木)」[「各部報告」『アチックマンスリー 36号』 1938: 2] というように引き継がれた。この大西と鈴木の交代は大西の大日本聯合青年団辭職と関係しているであろう (後述)。

さて、大日本聯合青年団とアチックの二足の草鞋を履きながら、おそらく充実した日々を過ごしていたであろう大西であったが、何の前触れもなく郷土資料陳列所の事実上の閉鎖を目の当たりにすることになる。

昭和十二年秋、大西氏が二三日アチックに行っていて青年館に戻って見たら、郷土資料陳列所は空になっていて、資料は小部屋に積み込まれていた。突然の事実上の閉鎖について調査部長であった下村胡人や田沢義鋪・熊谷辰次郎・松原一彦等に、閉鎖の理由を尋ねても答えてくれなかったという。今にして思えば、「一億一心火の玉」という標語の垂幕が日本青年館の正面に下げられた後の閉鎖であったことから軍部の圧力によるものと考えられた。また陳列所に見学して行 (ママ) た民族音楽研究家の兼常氏に「これじゃ潰されちゃうよ。鉄砲がないじゃないか。鉄砲がないと今の時代じゃ軍部に潰されちゃうよ」といわれたことが妙に耳に残っているという。[多仁 1989: 7-8]

それでも小部屋に押し込められた資料の跡始末を引き請け、日本女子大学の学生に手伝ってもらって、府下保谷の日本民族学研究所へ資料を運んだ。大西伍一氏自身は、残務整理を終え、昭和十三年

夏には佐藤新興生活館へ移った。[多仁 1989：8]

大西伍一氏の証言によれば、資料はトタン屋根の大きな建物に移したということであるが、(中略)数十点の資料が運び込まれたのである。[多仁 1989：8]

実際、保谷の日本民族学振興会には、「大日本聯合青年団郷土資料陳列所」のゴム印のある川越市市街図など三十一枚の地図が現在もあり、国立民族学博物館には、京都府西ノ京青年団寄贈の北野神社の「ずいき御輿」をはじめ、木沓等、四十二点の旧日本青年館所蔵資料が現存し、その変遷をとどめている。[多仁 1989：8]

おそらくこの陳列所の事実上の閉鎖前後で大西はアチックからも離れていったのであろう。漁民伝編纂は鈴木行三⁽¹²⁾が「引續き漁民事蹟の資料蒐集及び蒐集洩れの分再調査中。(鈴木)」[「各部報告」『アチックマンスリー 36号』1938：2]として後任となり継続されている。

尚、大西はその後、アチックに戻ることもなく終戦を迎えている。但し、大西とアチックとの関係がこれで終わってしまったのではなく、戦後においてアチックが財団法人日本常民文化研究所となった際、大西は「同人 評議員」として名を連ねており[櫻田 1955：321]、大西はアチックとある程度の繋がりを持ったまま戦後を迎えたと考えられる。

5. 郷土資料陳列所・民族学に対する敬三の考え

十島調査を行なった1934(昭和9)年は日本民族学会設立の年でもあり、日本において民族学がはじめて機関として組織された年でもある。前述したように同年5月の十島調査の後、11月2日に日本青年館内に郷土資料陳列所が開所したのだが、その開所後、同日本青年館において「郷土資料陳列所座談会」が開かれた。この座談会は「これからさきの活用と発展を圖るために、諸家の意見を聞くべく」[「斯界権威一堂に會す 郷土資料陳列所座談会 日本青年館に開く」『日本青年新聞 百二號』昭和九年十二月十五日付、三面]開かれた会であり、秋保安治(東京科学博物館館長)、今和次郎(早稲田大学建築科教授)、小田内通敏(文部省嘱託)、藤井達吉(工藝家)、小寺融吉(民俗藝術研究家)、洪沢敬三が参加、大日本聯合青年団からは「田澤理事長福島常任理事其他各部長所長並に陳列所係員出席」[「斯界権威一堂に會す 郷土資料陳列所座談会 日本青年館に開く」『日本青年新聞 百二號』昭和九年十二月十五日付、三面]が出席した。また同書では「なほ斯界の権威柳田國男氏や帝室博物館学藝官後藤守一氏や文部省社会教育官中田俊造氏等は御出席の御豫定のところ、急用で御出で願へなかつたことは遺憾であつた。」[「斯界権威一堂に會す 郷土資料陳列所座談会 日本青年館に開く」『日本青年新聞 百二號』昭和九年十二月十五日付、三面]としている。

同日の様子は「午後三時から陳列所縦覧、午後四時半頃から座談会にうつり、午後八時に至るまで有益なる所感の交換が行はれた。」[「斯界権威一堂に會す 郷土資料陳列所座談会 日本青年館に開く」『日本青年新聞 百二號』昭和九年十二月十五日付、三面]という。その座談会にて敬三は「郷土資料を蒐めるとしては、連合青年団が最も適任であるから大いにやっていただきたい。進んでは支那・印度・南洋等の隣国の資料とも交換して、東洋民族資料の比較研究の便を与へられたい」[『日本青年新聞 百二號』昭和九年十二月十五日付、三面]として、資料の収集や資料保存といった博物館的機能を担うことや、資料の比較研究という民族学的視点の研究に対する要望をして

いる。

この数日後に日本民族学会が設立されるわけであるが、その設立趣意書（1934（昭和9）年10月）には「民族学を文化人類学と見るにしても、原始文化学と解するにしても、これを体質人類学や人種学と区別して考へる時、それは人類文化の発生発展の総合的研究である。政治・経済・法律・宗教・言語その他民族の生活文化の徹底的研究は民族学的比較にまたねばならず、それらの歴史と心理の究明こそ我々の民族学の重要な使命である。」[財団法人民族学振興会 1984：4]、「我国の民族研究はこれまで民俗学の名に於て、主として郷土研究の方向に発展せしめられ、日本残存文化の採集と解説に貢献するところ多大なるものがあつた。しかし更にこれを綜合大成して、余地の民族文化との特徴を比較し、相互の系統関係を明かにして、文化の発生から接触伝播の理法を考究することは、海外に於ける民族学の進展からも当然に要求されてゐる。」[財団法人民族学振興会 1984：4]とあり、民族学が民俗学を包括する「綜合大成」としての研究を担うということが書かれている。敬三がこの趣意書作成に直接関与していたかは不明だが、前述の座談会の時点で資料の比較研究という民族学的視点に基づく研究を述べていることや、11月10日日本民族学会発起人会において日本民族学会理事に選ばれていることなどから[財団法人民族学振興会 1984：2]、敬三はこの内容におおよそ賛同していたと考えられる。このように敬三の民族学に対する認識とは、郷土研究としての民俗学を「日本残存文化の採集と解説」をする基礎的学問であると位置づけ、アチックにおいてこの基礎的研究である民俗学的調査を優先させたのである[小林 2014b：150-151]。その一方、陳列所に対しては博物館機能とそれに伴う資料の比較研究を要望したのである。

このような国内における民族学の形成と同時代的な潮流のなかで、前述したアチック初の長期参与観察調査を行っていた村上を途中で切り上げさせてまでして陳列所に勤めさせたことや、その村上が当時のアチックにおける民具研究や民具資料整理の実働作業における中心人物であったことから、陳列所に対する期待度は高かったといえるであろう。推測ではあるが、敬三（アチック）の民族学（民俗学）における将来的な構想において、民族学（民俗学）に関する研究機能はアチックが担い、資料の収集・保管といったいわゆる博物館機能は郷土資料陳列所が担うといった住み分けまで考えていたのではなかろうか。

1939（昭和14）年、保谷に日本民族学会附属博物館が設立されたこともこのことと関係し、また郷土資料陳列所の閉鎖と関連していたのであろう。日本民族学会附属博物館が設立の経緯は、1937（昭和12）年10月に敬三と高橋文太郎（以下、高橋）が日本民族学会に敷地・建物を寄付、日本民族学会附属研究所が竣工。これに伴い日本民族学会事務局がそれまでアチック新館二階にあったものがここに移転。1938（昭和13）年、武蔵野民家の移築。同年、郷土資料陳列所閉鎖に伴う資料の移管。1939（昭和14）年5月、日本民族学会附属博物館が開館、アチックの民具が同博物館に移管終了という流れである⁽¹³⁾[横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002：118]。1937（昭和12）年10月に敬三と高橋が日本民族学会に敷地・建物を寄付し博物館を設立しようとしたのはおそらく、博物館的機能を担うはずであった陳列所が閉鎖したため、陳列所に代わる博物館機能を持った施設をあらたに設立するためだったと考えられる。

6. おわりに

青年一人一人に合わせた教育という大志を抱き、その実践として大日本聯合青年団における「一人一研究」奨励や、地域における教育を目指した大西の新たな教育は、大日本聯合青年団郷土資料陳列所を通じた活動や、大日本聯合青年団の周辺にあった当時の民俗学へと繋がり、それが柳田、

アチックへと広がりを見せながら更なる発展・昇華してゆく可能性を秘めていた。

また、そのような活動に連動した大西の成果を見ていくと、上記民俗学に関する成果では『郷土研究家名簿』が連絡手段としての有用性や人的ネットワーク作成という草創期である当時の民俗学界に大きな貢献をしており、あらためてその価値は評価されるべきである。アチックにおいてもこの『郷土研究家名簿』の作成がなければアチックの通信調査の元となる名簿作成が困難であったと推測され、アチックの調査における郷土の人脈網が変わっていたと考えられる。

『郷土研究家名簿』作成以外にもこれら大日本聯合青年団における大西自身の活動に関連した人脈も当然評価されるべきである。大西を通じた人脈は、名簿に代表されるような郷土史家だけでなく、直接アチックに関わるような地方の人材（吉田三郎）、大日本聯合青年団郷土資料陳列所関係で知り得た人物（進藤松司）といった人脈（≡青年）をアチックに紹介することになった。特に当時の民俗学をさらに発展・昇華させる可能性を体現化していく郷土研究のモデルともいえる吉田とアチックとの出会いは、その後のアチックの研究に対する思考・姿勢やそれに伴う地方研究者への研究奨励といったアチックの方針を一定の方向へと決定づける機縁となったともいえるものであった。

このように教員を辞した後、大日本聯合青年団やアチックと関り、互いを結びつけるような媒介的な立場も担っていたであろう大西の志がこのまま実を結ぶかに思えた。しかし、当時の時代性を受けた大日本聯合青年団郷土資料陳列所の閉鎖という物理的な影響、またその時代性とともにな変わっていく大日本聯合青年団の変化（後ろ盾でもあった田沢の理事長辞職に伴う影響）によってその志が実を結ぶことなく終息してしまうのである。

もし、大日本聯合青年団郷土資料陳列所が縮小・閉鎖になっていなければ、現在存在するものとは別の、国立の民族・民俗博物館が神宮外苑に存在していた可能性がある。そしてその博物館は、柳田・渋沢が協力するという学術研究機関となっていた可能性があったのであり、その研究自体の担い手が、研究者はもちろん、郷土史家から地方の青年にまで及んでいた可能性があったのである。つまりそれは現在の民俗学や民族学（≡文化人類学）の姿が違っていた可能性もあったのである。

図版・参考資料

図1：1934「第二回全國商工精勵青年大會グラフ」日本青年新聞

図2：1934「力強く郷土美を誇る 郷土資料陳列所開所」『日本青年新聞 第百號』昭和九年十一月十五日付、四面

図3：神奈川大学日本常民文化研究所所蔵アチック写真 AL78-15

図4：神奈川大学日本常民文化研究所所蔵アチック写真 SR19-2-1

・アチック・ミュージアム『アチックマンスリー』アチック・ミュージアム（1～44号、季刊。昭和10年7月～昭和14年5月、昭和15年8月）

・大日本聯合青年団『日本青年新聞』

参考文献

大西伍一 1926『土の教育』平凡社

大西伍一 1943「早川孝太郎著、大藏永常、昭和十八年三月、山岡書店刊、A5判、本文四一四頁、寫眞版十八葉、定價四圓八十錢」財團法民族學教會編『民族學研究 新1（9）』財團法民族學教會

大西伍一 1968『私の聞き書き帖』慶友社

大西伍一 1972「吉田三郎君との出会い」『日本常民生活資料叢書 月報4』三一書房

大西伍一 1987『明治44年 大正元年生意氣少年日記』農山漁村文化協会

小林光一郎 2014a「アチック同人から見るアチック・ミュージアム研究史 ―藤木喜久馬を事例に―」

- 『民具研究 150号』日本民具学会
- 小林光一郎 2014b「澁澤敬三が組織する共同研究—昭和9年薩南十島調査を事例に」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か—日本民族学の二〇世紀—鳥居・澁澤・梅棹・佐々木』東京堂出版
- 小林千枝子 1983「大西伍一—思想と実践—1920年代の日本社会に生きた一教師の研究—」『教育学研究 第50巻第4号』日本教育学会
- 財団法人民族学振興会 1984『財団法人民族学振興会 五十年の歩み—日本民族学集団略史—』財団法人民族学振興会
- 桜田勝徳 1955「財団法人日本常民文化研究所名簿」『常民文化論集1』岡書院
- 多仁照廣 1989「幻の郷土博物館郷土資料陳列所」『日本青年館史編纂ニュース 3』日本青年館史編纂委員会・日本青年館青年情報資料センター
- 農村教育研究会編 1930『郷土研究家名簿』農村教育研究会
- 柏窓会 1956『柏葉拾遺』柏窓会
- 牧田茂 1998「郷土会」『柳田國男事典』勉誠出版株式会社
- 松本三喜夫 1996『野の手帖 柳田国男と小さき者のまなざし』青弓社
- 村上清文 1979「村上清文氏談話」渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編纂刊行会編
- 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館
- 吉田三郎 1979「渋沢敬三先生と私」渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編纂刊行会編

注

- (1) 1905–1979 男鹿の脇本村出身の農家。農民運動に参加、大西伍一によって敬三らアチックに紹介。1935年『男鹿寒風山麓農民手記』など、アチックにおいて出版される。東京に出て民族学博物館の管理人などの合間、敬三やアチックにて農業指導を行なう。その後、地元秋田に戻り、開拓村にて農家を継続。その間も数多くの執筆を行ない自著「もの言う百姓」を地で行った人物。
- (2) この辺りのこととして教育学者の小林は次のように述べている。「同時代の教育史研究で不可避のテーマとされてきているアナ・ボル論争—教育による社会改造は可能であるとするアナ派と不可能であるとするボル派の論争—に大西を位置づけてみよう。中内敏夫は「ボル派のいう不可能論は教職を捨てるという行動を帰結として導く」とのべている。大西は、アナ派の筆頭であった下中弥三郎と終始行動を共にしていたばかりでなく、『土の教育』は、「従来は社会の一属性として、それ自身に於て自己を解放する力を与へられてゐなかつた教育をこそ先づ革命しなければならん」（大西伍一『土の教育』（平凡社、1926）111頁）というように、教育による社会改造を訴える論調に満ちている、しかるに彼はボル派の論理的帰結となるような行動をとっている。すなわち、大西は教員をやめようとしており、実際の、この書が出版される直前に教育界から身を引いた」[小林 1983: 34]
- (3) 同書「はしがき」に「前年京都の黒正教授等の苦心に成つた郷土史研究者名簿は、我々の計書の大なる刺戟であり、又調査の基礎であつた。」[農村教育研究会編 1930: 1]とあり、また松本は『郷土研究家名簿』作成に際し、柳田から大西へ参考資料として京都大学農学部黒正巖のまとめた『郷土史研究者名簿』が渡されたと指摘している[松本 1996: 10]。
- (4) 本報告書論考篇収載、室井康成「選挙肅正運動と青年団——司馬遼太郎の“若衆”観からの問い——」参照。
- (5) 吉田は昭和13年頃から保谷の民族学博物館の管理人となる。「日録を書き終ってから第三の仕事を与えられた。それは保谷の民族学博物館の常任小使いになれというのである。それも良からうと承認する前に一つの条件を示した。何万という莫大な資料の掃除や火災の注意、又研究員へのお茶汲み仕事等それは自分の誠意で出来る事だが、ただあり来たりの使う人使われる人の人格的身分差別をされたり、又来る学者が己の学問を鼻にきせ学者ぶって、無学の私に対して卑下的行為の表現や行動の差別をされるようなら止める。栄一翁は官尊民卑の悪習を打破した、先生もそれを守ってくれますか。又暇があったら広大な博物館敷地の遊んでいる土地を耕しても良いか、その代り月給は、百姓をしていた時の収入以下でも良いという申込みをしたのであった。そしたら先生は、それは君言うまでもない、元来アチックではその精神で実行しているのだから心配はない、畑も耕し鶏も養いという事で手を打って民族学博物館住となった。（中略）私を民族学博物館によんだ後、先生は何回も、君はあれで満足しているのかい。出て来たのを後悔しているのではないかと心配してくれた。そう言われる度に私は、もったいなくてその都度土下座して感謝したい気持ちだった。」[吉田 1979: 311]、「かくて終戦となり、私は意を決し

て郷里に帰り、又百姓になる事をご相談申し上げたら、大変お喜びになられ、石黒先生ともご相談なされて、渋谷先生、有賀先生、中山先生等の友人だった二田是儀先生に紹介状を持たせられ、そして二田先生の大きなご尽力で現在地に開拓者として入植したのである。(中略) かくて入植後も先生はご心配下さりリュックを背に地下足袋で二十一年八月二十二日にお出でになられ、星の見えるあばら小屋で蚊に食われながらお泊り、開拓者に力づけて下さった。』[吉田 1979 : 312]

- (6) 進藤自身も陳列所に漁具とその解説を送った人物であり大日本聯合青年団と大西による情報が縁となってアチックと関りを強めた人物であったと考えられる [「青年の郷土研究 瀬戸内海の漁具」『日本青年新聞 第九十九號』昭和九年十一月一日付、九面]
- (7) アチックにおいても、その後のアチックの研究に対する思考・姿勢やそれに伴う地方研究者への研究奨励といった一連の行動の機縁となった事例であったともいえ、大西を中心とした人的ネットワークがアチックに大きく関与した事例だといえるであろう。
- (8) 村上がアチックに住み込むようになった昭和6年(1931)5月については拙著「アチック同人から見るアチック・ミュージアム研究史 ―藤木喜久馬を事例に―」を参照。
- (9) 1935(昭和10年)「二月十三日 村上清文氏が主任で青年團郷土資料室に開催された「スキーとカンヂキ」の展覧會(自十日至十六日)出品民具の撮影のため宮本馨太郎、木川半之丞兩氏出張。」[「DIARY」『アチックマンスリー 8号』1936 : 3]
- (10) 図3はその歓送会時の写真である。
- (11) 「(注：昭和十一年)二月五日 大西伍一氏来館(同氏は本日から漁民傳編纂のため出勤される由)」[「DIARY」『アチックマンスリー 8号』1936 : 3]
- (12) 鈴木は大蔵永常についても研究している [「DIARY」『アチックマンスリー 38号』1938 : 4-5]
- (13) その後、1940(昭和15)年1月に高橋は土地寄付を撤回する。